

第4章 学生の受け入れ

大学・学部等の学生の受け入れ

(学生募集方法、入学者選抜方法)

A群 大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

(入学者受け入れ方針等)

A群 入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

1. 入学者受け入れ方針

本学は、四弘誓願(他者の幸せに貢献する、己を厳しく律する、何でも学びとる精神を持つ、人格の完成を成し遂げる、以上4つの誓い)の仏教精神を基盤に、「人間」を探求し理解を深める教育・学術研究を、文化人類学と臨床心理学を通じ一体的にすすめることを目的とし設置された。さらに第3の学科として現代社会学科が2004年4月に開設され、ここに「文化」、「心」、「社会」の各象限から人間を学ぶ体制が整った。

このような学科編成を持つ本学の入学者選抜は、単に優秀な学生を選抜し確保する手段としてばかりではなく、大学の教育理念・社会貢献の実現に向かって、どのような能力、資質、経歴を持つ学生を期待するのか、大学の方向性・学科の特性・メッセージを示す機会でもある。多様な経験、能力を持った学生の受け入れにより、立体的な人間学をともに学び合える学習環境の実現を目指している。

かかる視点から本学における入学者選抜は、一般入試・推薦入試の教科の見直し、AO選抜・センター入利用選抜・社会人選抜の導入等本学の学科特性、高等学校の教育課程、受験生の適性などを考慮しながら、次の入学者受け入れ指針にもとづき進めている。

高等学校において文系基本科目を学習し、大学で学ぶにあたり十分な基礎学力を有していること。

自ら進んで学ぶための課題探求心と学習意欲を有していること。

社会に向けて大学での学習成果を社会へ還元したいという意欲を有していること。

専門的職業人や研究者として活躍する熱意と適性を有していること。

学生が互いに啓発し合い、より奥深い学習成果と人間理解を得られ環境を作るため、社会人など異なる経験・特性を持った学生を受入れること。

2. 学生募集方法

(1) 目的

本学の学科はユニークな分野であるため、学生募集の一番のポイントは、学科内容を高校生に分かりやすく伝えることにあり、本学の授業内容、教育を分かりやすく伝えることに主眼をおいている。

(2) 現状

学生募集活動は、主たる対象の高校生にとどまらず本学で学ぶ志を持った社会人(編入学、大学院)も視野に入れ行っている。活動の内容としては、次のとおりである。

各種媒体誌の作成・配布、進路情報誌、進路情報Webへの出広

を通じた入試資料請求者のデータ確保

受験生への直接広報として、業者主催の進学相談会参加

オープンキャンパス(8月2回、9月1回、10月1回)および学生、父兄等を対象とした大学見

学会の開催

高校で行われる入試説明会・模擬授業への参加

開学から現在に至るまでの外的環境は、少子化にともなう 18 歳人口の減少が進み、受験人口も 1992 年度をピークに減少の一途をたどっている。特に全国的な動向として、資格志向・就職難の世相を反映して、人文・教養系統の志願者の減少も続いている。本学も開設以来、この大きな潮流の中で、如何に受験者を確保し、定員の充足を図り、社会的使命を果たすために大学経営を維持するか、という極めて現実的な問題に曝されている。さらに、本学と同様な学科内容を持つ新設大学との競争、開学間もなく社会的な実績がないことや、規模も 1 学部 3 学科編成の大学でもあり、伝統を持つ総合大学との競争も続いている。「教学と経営」をどのようにバランスをとるか迫られている。

そのために学問分野を紹介する小冊子の工夫やホームページの充実、高等学校での模擬授業・講演などへ積極的に参加している。学科紹介の冊子では、具体的な学習内容を紹介した「学科紹介パンフレット（文化人類、臨床心理、現代社会別）」さらに文化人類では「チャカル（フィールドワーク実習）」などサブパンフレットを作成し、募集活動に当たって、教員は模擬授業の担当など、主として学問的な内容の紹介等を分担し、その他高校訪問や入試説明会等は職員が分担している。

(3) 点検・評価

ユニークな学科構成であるが故に、分かりづらいと言われる本学の学びの内容を高校生に分かりやすく伝えるために、高校生への広報媒体は、小冊子や新聞の作成といった紙媒体の他、ホームページの充実、高等学校での模擬授業・講演など広報活動を行える体制作り、本学の大学・学部の理念・目的・教育目標を社会に伝える努力を続けている。ただ、多くの受験生・入試関係者に本学の存在を認知してもらうためには、できるだけ多くの媒体に出広する必要があり、費用対効果の面から、効果測定を行っていくことが課題となっている。毎年効果を測定・評価した上で予算措置を行っているが、広報費が年々増えている現状にある。

オープンキャンパスのアンケート結果によれば、来校した高校生の満足度は高く、オープンキャンパスで最終的に出願の意思決定をしたという生徒が多く広報活動として非常に有効であるといえる。また学生募集活動は全学を上げて行う必要があり、開学当初は教職員で高校訪問を行っていた。しかし、その必要性和実施効果を検討し、現在は教員がすべきこと、職員がすべきことを区別し、それぞれが役割・立場に応じた学生募集活動を行っている。この方針は今後も継続してゆきたい。

本学の学びを分かりやすく高校教諭や生徒等に伝えること目的に、各学科ごとの小冊子を作成している。とくに、文化人類学科の紹介冊子（タブロイド版新聞形式）である「チャカル」は、学生・教員・職員が一緒に作成しているものでユニークなものといえる。こういった広報ツールを地道に作成していくことがこれからも必要と思われる。しかし、学科が増設されたことに加え、広報関係業務と入試関係業務を現在の陣容で充実させていくことは、課題が山積する中で手薄といわざるを得ない。

一方、これらの活動の結果を入学志願者数という視点で見ると、入学志願者数は開学以来年々減少を続けてきたが、全体傾向としては 2000 年代に入って減少率が小さくなり、2002 年センター試験利用選抜導入によって、開学以来始めて前年比が増となった。2003 年度は減少し、2004 年には現代社会の開設広報の効果もあって、臨床心理が前年対比 5.6%の志願者増、全体で 15.3%増となった。文化人類は 2 年連続で前年増となっていたが、2004 年は 5.4%減少した。推薦入学選抜では増加したが、一般入学選抜の減少が大きかった。現代社会は 230 名の志願者で、開設初年度としては厳しい状況にある。ちなみに募集定員と志願者数の比で見ると、文化人類学科 = 3.09、臨床心理学科 = 8.07、現代

社会 = 2.88 倍で、臨床心理については倍率が確保されているが文化人類、現代社会についてはほぼ全入の状態といわざるを得ない。抜本的に学生募集活動を見直していく段階に至っているといわざるを得ない。

「受け入れ指針」に沿って入学した志ある学生には、カリキュラム・授業展開・学園生活が対応しているか「自己点検」等を通じて改善を今まで以上に各学科に提言していくことを課題と考えている。さらに、社会人に対する本学への門戸開放についても、学部・研究科も含め検討すると共に、将来的には昼夜開講生なども考えていきたい。

3. 入学者選抜方法

本学の入学者選考の方法・募集対策の基本方針を定めるために、学部長を委員長とし、学科長、教務部長、学生部長と入試実行委員長・副委員長で構成される「入試委員会」が置かれている。その方針に基づき、試験日程や試験科目、また教学上との関係を分析し、入学選抜試験の企画・立案、そして実施実務を担当するために各学科から選出された委員で構成される「入試実行委員会」が、事務局「入試広報センター」と連携して業務を推進している。入学者判定については入試委員会と実行委員会が合同で原案を作成し、教授会へ原案を提出し審議を行う。したがって、入学者選抜基準は教授会で審議・承認をへて決定される。

本学の入学者選抜試験は推薦入学選抜と一般入学選抜に大別できる。それぞれの試験日程は、各試験の合格発表の後に次の試験日を設定し、それぞれの試験の可否を確認して受験できるように組んでいる。受験生は併せて最高7回試験を受験することができ、自分に合った入学試験を選択することが出来る。以下選抜方法毎に述べる。(別表1・2)

推薦入学選抜

(1) 現状

本学では、指定校制と公募制による推薦入学制度を取り入れている。推薦入学制度の目的は次のとおりである。

京都文教大学の学問領域に関心が強く、本学を慕う受験生を積極的に入学させる。

ペーパーテストでは把握できない多方面な能力、学力を持つ生徒を高等学校長から推薦してもらい、受験生の姿が見えない学力試験の弊害を取り除く。

特別活動に優れた能力を発揮している特色ある生徒を入学させる。

1) 一般推薦

指定校は高校との日常の関係性を重視した制度で地域を限定しているのに対し、公募制は広く全国の高校から本学の教育方針を理解した入学者を受け入れている。選抜方法は、高校ごとの格差を考慮し、出願時の評定基準は設けず、本学が独自に行う基礎学力検査を課し同一基準で判定している。

昨年度まで小論文・面接であったが、基礎学力を確認する意味から小論文を廃止し、基礎学力検査と面接とで判定し、日頃の生活態度や勤勉性・意欲といった人間面を重視して選抜している。臨床心理学科の初年度は受験生にとって、入試実績がないため出願を控える傾向にあった。2年目は予想通り増加した。受験生の出身地で見ると、京都・大阪・滋賀の占める割合が、文化人類学科63%、臨床心理学科43%で全国からも志願者を集めている。文化人類・臨床心理の志願者の広がりは学科特性の独自性に起因するものと推測される。しかし、現代社会学科は京都・大阪・滋賀で志願者の83%を占

めている。文系志願者全体のなかで社会科学系は志願者が多く、したがって競合大学も数多い。2004年度は認可時期が11月下旬であり、この認可の遅さが、他大学の推薦入試が終了した時期に当たり、本学を第2志望とする層も吸収できた。

基礎学力試験と面接試験の配点は1：1である。

出願時の評定基準を設けないことによって、他大学で行われている自己推薦と一般推薦とを折衷した選抜方式となっている。また専願制により、推薦入学制度の本来の趣旨を守っている。

2) 指定校推薦

選抜方法は、推薦基準を満たした志願者について面接を行い、日頃の生活態度や勤勉性・意欲といった人間性を重視して入学を認めている。指定校推薦は、入試実行委員会で基本案を作成し各学科会で審議の上、毎年度見直しを実施している。

一般推薦・一般入試の高校別志願者数・合格者数・入学者数

本学学科内容と高等学校の学科内容との親近性

本学の教育方針を熟知し、今後の高大連携の期待度

以上の点から高校を選定し、日頃生徒と接する担任の先生や学校長の責任ある推薦で入学を認め、高校と本学との信頼関係で成立する入学制度であり、関係性を強めること共に学生を育てることを重視している。したがって、指定高校は京都・滋賀・大阪・奈良の地域を中心に選定を行っている。

3) 京都文教高等学校特別推薦

高等学校と協議の上、出願基準を3.0以上と定め、併設高校としての優遇措置を行っている。11月と3月（臨床心理学科を除く）に選考を行っているが、文化人類学科・現代社会学科の3月2期募集に関しては、高校の合格実績アップと大学の両学科の特別推薦募集枠の補完する意味がある。高等学校の学生・保護者に対しては、本学の学科内容を十分理解した上で出願出来るよう、生徒・保護者に対して、直接、間接的に高等学校と大学が連携して年4回程度、講演会・個別相談会を実施し、学生の進路指導にあっている。

4) 臨床心理学科社会人推薦

本学のような学科内容を持つ大学においては、社会人への再教育・学問的方法論の導入機会を設けることも、社会的使命であると考え。また、カリキュラムの中において実践教育が大きな位置づけを持っている本学においては、社会的経験を有する学生が社会経験のない学生とともに学ぶことで、授業の活性化と深みが得られる。この点を目的に昨年度導入されたのがこの制度である。

出願条件は3月31日現在、満23歳以上で次の3つの要件をいずれも満たすことが条件である。

社会人としての経験を有すること（専業主婦・家事手伝いを含む。浪人・専門学校・各種学校・大学などの在学は含まない）

大学入学資格を有すること（要資格証明書提出）

合格した場合、本学への入学を確約できる者（専願制）

(2) 点検・評価

推薦入試全体では指定校推薦、京都文教高校からの特別推薦など、基本的に合格が前提の試験制度の

志願者数が年度ごとに大きく変動し、一般推薦選抜に影響を与えている。推薦定員枠通りに入学者を受け入れることは非常に難しくなっている。

2004年度推薦入試制度別志願者数 ()内前年

学 科	一般推薦	指定校推薦	特別推薦	合 計
文化人類学科	21(22)	36(15)	16(15)	73(52)
臨床心理学科	209(179)	11(2)	25(29)	245(210)
現代社会学科	32(---)	8(--)	16(--)	56(---)
合 計	262(201)	55(17)	57(44)	374(262)

(定員)

文化人類	25名	10名	15名
臨床心理	40名	10名	25名
現代社会	15名	10名	15名

* 臨床心理社会人推薦は若干名

1) 一般推薦入学

基礎学力検査と面接試験の配点は1:1である。成績評価は試験内容の性格により、基礎学力検査は設問ごとの配点、面接は段階評価で行っている。基礎学力検査の得点のきざみは細かく、面接の得点のきざみが荒くなる。したがって、面接試験の結果次第では大きく、順位が変動することもある。面接と基礎学力検査の認識に委員にも認識の差がある。

また、高等学校の学力補完、大学への導入学習としての事前学習が行われていない。

2) 指定校推薦

1999年度に文化人類学科、2003年度に臨床心理学科、現代社会学科は2004年の設置初年度から指定校制による推薦入学制度を導入している。文化人類学科が導入した当初は、指定校数は13校だったが、現在では124校になっている。特に文化人類学科は全年比2倍を超える志願者増加となった。

2004年度 指定校推薦状況 ()内前年

	定員	指定校数	志願者数	志願率(%)
文化人類学科	10	113(73)	36(15)	31.9(20.5)
臨床心理学科	10	31(12)	11(2)	35.5(16.7)
現代社会学科	10	13()	8()	
合計	30	144(82)	55(17)	

指定校は、学科で重複している高校があるため合計とは一致しない。

文化人類学科に関しては、定員10名に対して36名と大幅に定員を超過している。年により志願者数の変動が大きく、推薦定員枠に全体に占める影響が大きい。

3) 京都文教高等学校特別推薦

臨床心理学科を除き、11月の前期と3月の後期募集を行っている。高等学校の進路指導においては、1学科のみ実施していないことになり、指導上バランスを欠いていると言える。

同一学園における優遇措置としての意味がこの制度にはある。しかしモチベーションの有り様は二極化している。すなわち中学高校の進学時点で大学の学びを意識して高等学校で努力した層と、優遇措置があるから進学を希望した層とである。

昨年、高校現場より合格後の問題、特に他の学生が受験している1、2月の時期における生活指導上の問題点が指摘された。大学で対応を検討し、事前の課題学習を2004年度より実施し、スクーリングの充実を図った。これはモチベーションの向上と基礎学力の育成を目的に実施しており、事前学習の基本形が出来たと言える。

高校の進学指導は京都文教大学以外の大学も視野に置きおこなわれるため、生徒に対する本学からの広報は不可欠である。従って京都文教高校からの志願者を得るために、何度も高校へ足を運び生徒に講演会・相談会を行うことに重点を置いて活動した。結果的に3学科とも定員を充足し、高校教員との関係もより濃密になった。生徒を1学期中の接触からオープンキャンパスへ誘導したことも出願の後押しとなった。

4) 臨床心理学科社会人推薦

社会人を対象に1年次入学や昼夜開講制でない授業形態は、入学意思があっても、社会人の生活を考えると現実的ではない。

2年目の実施であるが、出願者は出願年齢に達した潜在的浪人生や高校時代の不登校生などが多く、本来の目的である社会での経験を動機付けとした学生の志願に結びついていない。出願資格が社会人に向けての制度とは言い難い。

(3) 改善・改革方策

1) 一般推薦入学

本学の推薦入試はすべて専願制をとっている。学科のユニークさを分かりやすく、地道に伝え、第1志望者を掘り起こすことが重要である。問題は文化人類学科・現代社会学科の一般推薦志願者を如何に増やすかという点につきる。特に文化人類はこの点に課題がある。学生の目線に立った「高校生に分かる文化人類学」を主眼においた、大学案内と学科紹介が急務である。

現代社会学科は来年度11月実施となる。他校との競合関係が、今年より厳しくなることが予想さ、今年のように第2志望を取り込むことができない。社会科学系の学科は関西圏に多数有り、このエリアだけで併願関係が成立する。他の2学科のように、全国幅広く学生を集めることは難しい。近畿エリアを中心に他大学との差別化をすすめて、「法学、経済・経営学、社会学」を横断的に学べる特色を強力に打ち出す広報を行うことが必要である。特に実習先など具体的な体験学習先を見せることにより、差別化を伝えられる。

広報手段としては、不特定多数から本学を意識させるために、インターネット環境から検索エンジンにヒットするよう、学科・教員・授業紹介を意識したホームページの充実化をより進める必要がある。近隣高等学校の関係強化と第1志望者の掘り起こしを目的とした、継続的な年3～4回程度の高校訪問と模擬授業を通して本学をアピール出来る態勢を作り、学びの内容を伝えていく。文化人類学科・現代社会学科の志願者数増加策として併願制の導入も考えられるが、一般入試の先行実施に過ぎなく、また

授業料返還問題も絡み志願者が増加しても入学者数が読めない。これらの点から推薦入試で本学を第1志望とする専願制を継続し、可能な限り推薦入学者選抜の本来の趣旨を遵守していく。

基礎学力検査と面接の問題は、人物評価として学科試験ほど細かいきざみで評価が出来ない面接試験の必然的結果である。しかし、基礎学力検査に基準点を設けるなども念頭におき、位置付けを再確認する必要がある。

2) 指定校推薦

文化人類学科は指定校数を増やし、結果として定員10名に対して36名の志願者があり、予想数を大きく上回った。想定は20名未満であり、2004年の数は上限値と考える。若干の見直しをし、定員を10名から15名程度(一般推薦枠より)に変更し定員と実数との乖離を是正する。ただ現在124校という指定校数は他の2学科と比べ多すぎる。推薦者が何年も出ていない整理すべき指定校は多い。指定校を単に数を増やし志願者数を確保するのではなく、学科の学びと合致したスポーツ・音楽・芸術などに実績を持つ学生を対象に、視点を変えた指定校の検討が必要である。

臨床心理学科は定員10名に対して11名の志願者だった。臨床に関しては準トップ校への依頼数を増やした結果によるものである。適正であり、2005年度以降も継続する。

現代社会学科は定員10名に対して8名の志願者であった。開設初年度、12月募集ということもあり志願者数の予想が立てづらいことと、定員80名確保の最初の試験となるため、数の確保にポイントを置いた緊急待避的な指定校依頼であった。その点を踏まえ、近隣で親近性のある学科を有する高等学校などの視点を明確にした、指定校先・数の再検討が必要である。

3) 京都文教高等学校特別推薦

文化人類学科・現代社会学科の3月2期募集に関しては、高校の合格実績のアップと大学の両学科の特別推薦募集の補完の意味がある。これらの方針を継続させ、臨床心理を含め特別推薦前期、後期募集制度として検討する。

校内の進路指導への協力、情報提供として、従来、行ってきた生徒・父母対象の相談会にほか、3学年の担任に対しての説明会などを高校進路と相談しながら検討する。

4) 臨床心理学科社会人推薦

現行の社会人推薦を廃止し、編入学選抜に社会人編入の制度を設ける。

学部での社会人推薦を廃止し、編入に社会人枠を設けることの方が、社会人に門戸を開放する意味がある。

一般入学選抜選考

(1) 現状

一般入学者選抜は高等学校での学習習熟度を選抜判定基準においた制度である。大学進学文系志願者が学ぶ教科・科目を受験科目とし、本学入学者選抜の中心として位置付けている。

1) 一般入学選抜A方式

これは英語1教科の200点満点のマーク式筆記試験であり、1月末に本学を含め4地区で実施した。

開学当初の本学の一般入試前期は既存の他大学との競合を避け、2月の中旬にせざるを得なかった。2001年度にこれを改善するため、一部定員をさいて英語1科目の一般入試A方式として1月末の日程に設定した。しかし、近年の志願状況から判断すると、英語1科目入試が現在の受験生に回避されていると推測される。

2) 一般入学選抜B方式

これは本学の一般入試の中心となる試験で、本学を含め7会場で実施した。英語、選択(国語・日本史・世界史)の2教科のマーク式筆記試験で、配点は各100点の合計200点である。国語は現代文と古文である。2月実施で2日間の試験日自由選択制である。この制度は2日にわたる試験を合わせて判定する。特徴は一人に2回の受験機会があることと、2回受験の場合は高得点の受験日の得点が採用されることである。判定は得点の試験科目間、日程間の問題難易度差による公平性を確保するため、得点を標準化して行っている。

3) 一般入学選抜C方式

これは英語、国語の2教科の筆記試験である。配点は各100点の合計200点で、国語は現代文のみである。3月の実施で本学のみで実施しているが、入学定員の調整的な役割が大きい。

4) AO入学選抜

文化人類学科のみが実施している。2000年の制度新設以来、8月のオープンキャンパスで学科・制度説明を個別に行い、学科の学びと志願者の学習目的が一致しているかどうか、相互確認の上、エントリー(申し込み)する流れになっている。

文化人類学科は学習手段の根幹をなすフィールドワークを通じて、学生一人ひとりの個性と自由を尊重し、実践力のある知性を育成したいと考えている。この目的に沿って設けられた選抜制度がAO入学選抜である。従来型の学力試験では計ることの出来ない、問題意識・学習目的に応じた企画力・行動力・プレゼンテーション能力などを、合計3回の審査員とのディスカッションを通じて、課題をまとめることによって審査される。選抜の流れは以下の通り。

8月オープンキャンパス	(選抜の趣旨説明、エントリー方法)
9月上旬エントリー	(エントリーシート、研究レポート、作品提出)
9月中旬	(第1回面談 プレゼンテーション、次回課題指示)
9月下旬	(課題発表)
10月上旬	(グループ面談)
10月中旬	(出願・合格発表)

5) 大学入試センター試験利用選抜

大学入試センター試験の成績を利用した入学試験である。

英語、国語・必須、選択科目1科目の3教科型で、配点は各100点の合計300点である。理系科目受験者、遠隔地からの志願者などを対象として設けた試験制度で、前期は事前出願、後期は事後出願となっている。

(2) 点検・評価

1) 一般入学選抜 (A・B・C方式)

一般入試では 2001～2003 年の改革により、入学対象年齢の拡大、遠隔地受験者の配慮、高等学校との連携など、従来、本学が立ち後れていた点が格段に改善された。志願者状況(下記<資料参照>)全体では 15.3%の伸びを示しているが、これは現代社会の新設による増加である。現代社会の志願者分を除くと 103.3%でほぼ横ばいである。

内訳は文化人類で、推薦入試は増加したものの、一般入試(A・B・C方式)対前年マイナス29名、87.5%、センター利用でもマイナス8名、91.1%であった。臨床心理は一般入試(A・B・C方式)対前年プラス63名、106.2%、センター利用はマイナス8名、94.4%であった。文化人類は一般入試(A・B・C方式)で2年連続の減少である。減少の原因はA方式文化人類で前年55名、25名、臨床心理が260名、248名によるところが大きい。

現代社会も400名程度の受験者を想定していたが230名の志願となり、厳しい状況であった。結果的に現代社会は文化人類と志願者数・学力とも非常に近似していた。このことは、募集初年度であった現代社会志望者が入試レベルを文化人類学科にイメージして受験した結果であった。また、業者の設定した予想ランキングも、臨床心理より文化人類に近かったことに起因していると推測できる。募集広報の基本的考え方は、先に述べた推薦入試の広報活動と同様である。

入試制度としての検討は、これ以上の入試方式を多様化は、受験生にとって各方式の定員が少なくなり、合格者数も分割されることを意味する。その結果、何回も繰り返し受験する学生が増えて行くことになる。本学を志望する学生にとっては受験機会の増加というメリットもあるが、反面、本学を第1志望に考えている受験者が、何度も不合格となることもある。試験方式の増加による問題点も浮かび上がってきた。

A方式で英語1科目が受験生に敬遠されている。

本学の教職員数では試験実施に関わる各教員の物理的負担が大きくなってきていること。

入試問題の作問について、B、C方式では得点標準化を行い、受験科目により、不公平とならないように対応を行っている。しかし、平均点にはバラつきもあり、また若干、当日の問題訂正があった。

()前年

	A方式	B方式	C方式
文化人類	25 (55)	143 (133)	36 (44)
臨床心理	248 (260)	713 (627)	124 (135)
現代社会	24 ()	111 ()	39 ()

2) AO入学選抜

あくまでも、文化人類学的就学目的があるかどうか、その点を重視している。ねらいを明確に記載し、過去の志願者のエントリーテーマ等を記載したパンフを作り広報している。AO本来の目的に合致した生徒のみを選抜しているので、エントリー者数は僅かではあるが、着実に増加している。

遠隔地から学習テーマをもった極めてモチベーションの高い学生が集まりつつある反面、受験生にとっては「学力試験を必要としない試験」という認識がある。本学でも学力試験回避を目的とした受験生の増加という問題点が浮き彫りになってきた。

過去2年で評定平均2点台の受験生が増加している。今年は24名中12名が2点台であった。一般推薦の基礎学力検査導入により、学力試験を回避した推薦受験者が流れていると考えられる。ちなみに

合格者 12 名のうち 2 点台は 4 名である。

選考方法は 3 回の面談(2 回のプレゼンテーションと 1 回のグループ面接) さらに合格後は 3 回のサポート学習(読解、読書レポート、英作文 - 各添削つき) を実施しており、他大学同レベルの A O 選考に比べ充実している。

上述のように一人ひとりに十分な時間と課題を与え、他大学に比べ A O 入学選抜の趣旨を厳守している。高校からの評価も高いので、次年度も現状で継続していく。

	エントリー者数	志願者数	合格者数	入学者数
2000	15	13	13	12
2001	17	14	14	13
2002	21	15	15	15
2003	24	13	13	13

(3) 改善・改革方策

1) 一般入学選抜 (A ・ B ・ C 方式)

A 方式を C 方式と同様にして英語と現代文とにすれば、受験者のニーズに適応できると推測できる。しかし、結果的に A ~ C 方式まで似たような試験科目になり、3 回入学者選抜を実施する意味は薄れる。数的には B 方式の志願者が A 方式へ流出し、A と B 方式あわせて志願者増が予想される。

これらの問題を前提に、B 方式は私立文系受験者の一般的な受験科目の 3 教科への移行を行い、多くの受験生が対応できる環境をつくる。また、本学の教学上のメッセージとして、英語・国語を大学での基礎学力として位置付け、受験生・高等学校へ発信する。A ・ C 方式と差別化する。以下 ~ の順に制度変更することを検討したい。

		現 行	変更例
1 月	A 方式	英語	英語 + 現代文
2 月	B 方式	英語 + 選択 (国語、日本、世界)	英語 + 国語 + 選択 (日本、世界)
	センタ - 前期	英語 + 国語 + 選択	英語 + 国語 + 選択
3 月	C 方式	英語 + 現代文	廃止
	センタ - 後期	英語 + 国語 + 選択	英語 + 国語 + 選択

問題作成に関しては、試験実施後のデータを検証・分析して具体的に問題難易度・配点のシミュレーションを行い、改善点を明確にする事後チェック検討会を行う。問題訂正については、校訂・校正ミスの原因を探り、そのチェックポイントをマニュアル化し累積していく。また、出題者以外のチェック担当者の導入を検討する。

学生募集の上で受験倍率は人気のバロメータの一つと言える。私立大学においては複数の入試制度と他学科併願制度、検定料の割引を行い倍率を確保することが一般的であり、多分に大学の論理による制度の色彩が強い。勿論、受験者にとっては再チャレンジ、複数学科の判定が出来るメリットもあるが、行き過ぎると小定員・多方式の選抜制度となり、受験生に精神的なストレスや金銭的な負担を強いることになる。現行の制度では、同一受験者が何度も受験することになり、本学もその傾向は否めない。

本学のように特色が明確な学科を有する場合に、同一受験生による併願増加を避け、志願者を増加させるためには、新たに他大学との併願関係を開拓する必要がある。文化人類学科、現代社会学科は既存大学の学科構成・学問内容との関連性を示し、本学でも学べることを、パンフレット・ホームページでアピールしていく。また、入学者選抜制度で後述するが、私大文系の一般的な入試スタイルである 3 教科

入試の導入を検討する必要がある。

「教学」と「経営」とのバランス、そしてより受験生のニーズに沿った制度の再構築が必要である。

2) AO入学選抜

AO入試が本学のオリジナリティーある制度として維持していくためには、AOの位置づけ、判定基準、入学後の学生の指導・育成方法など引き続き検討をしていく必要がある。

結果的に一般推薦とAOは競合関係にあるといえる。推薦全体の枠組みで見ると、

高評定者	指定校推薦
中評定者	一般推薦
低評定者	AO(ただし学習課題は持っている)

という棲み分けになってきている。

本学の一般推薦入試は評定基準がなく、本質的には自己推薦である。AOも自己推薦であり、異なるのは志願者に対して基礎学力試験、課題試験のどちらで受験するかということになる。異なるのは面接の充実度の差、つまり志願者の学習課題にどれだけ重きを置くかという点である。これは一般推薦の面接で問題意識、学習課題を持った学生の評価基準の問題であり、現状で言えば、個別面接の導入・充実をはかる事により対応できる。入学後は特にサポートはしていない。これらの問題を考えると、他の中堅以下大学と同様に、AOが一般入試枠で受験生の早期確保の手段とならないオリジナリティーある制度として維持・発展するためにはAOの位置づけを再確認しエントリー者に伝えることが必要である。あるいは芸術・スポーツで活躍した学生と文化人類学的学びへの発展・結びつけなども検討する必要がある。

編入学選抜

(1) 現状

入学志願者数・合格者数は次の通りである。文化人類学科は定員を満たすに至っていない。最近編入学相談会・媒体誌・連合広告など業者による広報媒体も減少しつつあり、明らかにマーケットが縮小している。

()内前年

		募集人員	志願者	受験者数	合格者数	手続者数	辞退者数	入学者数
文化人類学科	特別編入	10	5(3)	5(3)	5(3)	5(3)	0(1)	5(2)
	指定短大	3	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	0(0)	1(0)
	一般編入	7	10(9)	10(9)	9(9)	6(6)	0(0)	6(6)
	合計	20	16(12)	16(12)	15(12)	12(9)	0(1)	12(8)
臨床心理学科	特別編入	10	9(10)	9(10)	9(10)	8(10)	0(0)	8(10)
	一般編入	10	21(38)	21(37)	12(14)	11(11)	0(0)	11(11)
	合計	20	30(48)	30(47)	21(24)	19(21)	0(0)	19(21)

試験実施の内容は、以下のようにいずれも記述式で実施されており、入学者選抜としての問題はない。

文化人類 英語、面接

(2) 点検・評価

開学から現在に至るまでの外的環境は、少子化にともなう18歳人口の減少が進み、受験人口も1992年度をピークに減少の一途をたどっている。特に全国的な動向として、資格志向・就職難の世相を反映して、人文・教養系統の志願者の減少も続いている。短期大学入学者の減少や新設大学の増加で、選ばなければ4年生大学で勉強することが可能になってきている。人気のある系統は医療看護などの一部だけである。編入学の制度は受験生が多かった時期の便宜的な救済措置であり、早晚人員確保が成り立たなくなると想像される。

試験内容は入学者選抜としての問題はない。問題は制度としての役割を見直し、現在のニーズあった対象に改変するか、制度を廃止するかという点にある。

(3) 改善・改革方策

これからは大学、短期大学の学生より、社会人の再学習、入学に焦点を当てるべきであり、社会人を積極的に受入れることは、本学の学科特性を考えると社会的、広報的にも意味のあることである。一般編入以外に、制度の見直しを次の方向性で行ないたい。

社会人選抜：文化人類学科は社会経験を通じて問題意識を持った大学・短期大学卒業者を対象とし、特に臨床心理学科は医療・福祉系の大学・短期大学卒業者を対象。

特別選抜：京都文教短期大学卒業の教育関係の社会人を対象。

指定校推薦：臨床心理学科で近隣の心理系学科・専攻を持つ短期大学を対象。

文化人類学科は語学、観光系専門学校の進学実態を調査し、可能かどうかの検討を行う。

社会人に対する本学への門戸開放についても、学部・研究科も含め検討すると共に、将来的には昼夜開講生なども考えていきたい。

(別表1) 募集定員

学科	入学定員	募集人員									
		推薦入学				A O	一般入学			センター利用	
		一般	指定校	特別	社会人		A方式	B方式	C方式	前期	後期
文化人類	120名	25名	10名	15名	-	10名	10名	30名	5名	10名	5名
臨床心理	200名	40名	10名	25名	若干名	-	30名	70名	10名	10名	5名
現代社会	80名	15名	10名	15名	-	-	10名	25名	5名	-	-

(別表2) 選抜制度

選 抜 制 度		選考日		学外試験場	選 抜 方 法
推薦入学	一般	11月15日 12月20日	両学科 現代社会		面接・基礎学力検査
	指定校	11月15日 12月20日	両学科 現代社会		面接・志望理由書
	特別				面接・(志望理由書)
	社会人特別	10月19日	臨床心理		面接・小論文・志望理由書
A O入学	一般	9月21日 10月5,19日	文化人類		面談(3回実施)
一般入学	A方式	1月25日		静岡、広島、大阪	英語
	B方式	2月10日 2月12日		東京、静岡、福岡 名古屋、大阪、岡山	英語 選択(国語・日本史・世界史)
	C方式	3月2日			英語・国語(現代文)
センター 試験利用	前期	1月16日			個別試験は課さない
	後期	2月25日			

総志願者数推移

()はセンター試験利用

		2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
全体	志願者数	2518	2242	2257(379)	1920(378)	2214(354)
	前年比	81.4	89.0	100.7	85.1	115.3
文化人 類学科	志願者数	387	275	371(58)	392(90)	371(82)
	前年比	70.2	71.6	134.9	105.7	94.6
臨床心 理学科	志願者数	2131	1967	1886(318)	1528(288)	1613(272)
	前年比	83.8	92.3	95.9	81.0	105.6
現代社	志願者数					230()

会学科	前年比					
-----	-----	--	--	--	--	--

推薦入試志願者推移

		2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
全体	志願者数	460	391	287	261	374
	前年比		85.0	73.4	90.9	133.3
文化人類 学科	志願者数	85	53	52	53	73
	前年比	94.4	62.4	98.1	102.0	137.7
臨床心理 学科	志願者数	375	338	235	208	245
	前年比	77.3	90.1	69.5	88.5	117.9
現代社会 学科	志願者数					56
	前年比					

一般入試志願者推移 (A・B・C方式合計)

		2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
全体	志願者数	2058	1838	1580	1254	1288
	前年比	81.7	89.3	86.0	79.4	102.7
文化人類 学科	志願者数	302	209	247	232	203
	前年比	65.5	69.2	118.2	93.9	87.5
臨床心理 学科	志願者数	1756	1629	1333	1022	1085
	前年比	85.3	92.8	81.8	76.7	106.2
現代社会 学科	志願者数					174 ()
	前年比					

4. 定員管理

A群 学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と入学者数の比率の適切性

(1) 現状

1) 入学定員と入学者数の比率

		2001	2002	2003	2004
文化人類	入学定員	120	120	120	120
	入学者数	146	151	149	139
	定員超過率	1.22	1.26	1.24	1.16
臨床心理	入学定員	120	200	200	200
	入学者数	150	217	210	225
	定員超過率	1.25	1.09	1.05	1.13
現代社会	入学定員				80
	入学者数				96
	定員超過率				1.20
学部合計	入学定員	240	320	320	400
	入学者数	296	368	359	460
	定員超過率	1.23	1.15	1.12	1.15

2) 学生収容定員と在籍学生数

		2001	2002	2003	2004
文化人類	収容定員	520	520	520	520
	在籍学生数	614	635	622	624
	定員超過率	1.18	1.22	1.20	1.20
臨床心理	収容定員	520	640	680	760
	在籍学生数	649	725	793	868
	定員超過率	1.25	1.21	1.17	1.14
現代社会	収容定員				80
	在籍学生数				96
	定員超過率				1.20
学部合計	収容定員	1040	1120	1200	1360
	在籍学生数	1263	1360	1415	1588
	定員超過率	1.21	1.21	1.18	1.17

学生数に関してはこれまでは入学者数を中心に、目標入学者数は入学定員の1.3倍を上限としつつ学力レベルと、教育環境への影響に留意しつつ決めてきた。

入学試験の合格者が最終的に入学する数は、年度により変動している。そのため、当該年度の入学者数は、入学手続率や入学辞退率の過年度実績をベースにして、入学定員が未達にならず、尚かつ設置基準上の数を上回らない範囲で設定している。本学では、概ね入学定員超過率の目安を1.2程度とし、合格者数を決定してきた。この5年間の結果は表の通りである。

(2) 点検・評価

入学者数については、学科毎にそれぞれの入試環境の影響を反映した特徴があるが、学部でみると、概ね入学定員超過率は1.2前後で推移しており特別の問題はない。在籍学生数の学部収容定員超過率は概ね1.2前後で推移しており、教学上の問題も出ておらず、ほぼ妥当な状態といえる。

臨床心理学科は、2002年度に入学定員を120名から200名に増員した段階で、教育環境の悪化や入学者の学力レベルの低下を避けるため、入学者数を極力入学定員に近く設定してきた。その結果、定員増の学年進行につれ、入学定員超過率は下がっている。将来、入学者をあまり入学定員に近い数で入学させていくと収容定員を割り込むおそれがあり、入学者数の決定にあたっては入学定員超過率のみでみるのではなく、4年後の在籍学生数が収容定員を下回らないように見込んで考える必要がある。

文化人類学科の在籍学生数は、ほぼ一定数を維持し安定している。ただし、この数年、文化人類学科については志願者の減少が大きく、学力レベルを落とさずに入学者数を一定数確保することが難しい状態になってきている。当面は入学定員を確保できたとしても、こういう状態が続けば、将来収容定員の確保が難しくなるおそれがある。

現代社会学科については昨年設置したばかりのため全体的な評価はできないが、初年度の入試環境からみると学生の確保は予断を許さない。受験人口の減少を前提にしっかりとした受験広報に取り組んでいく必要がある。

(3) 改善・改革方策

これまで入学者数については、入学定員超過率を管理指標として管理してきた。学生数は、財務的な視点からすれば多い方がよいが、教育の質保障という視点からは入学定員を遵守する必要があり、更には入試環境を踏まえて見ていかざるを得ないという側面もある。これとは別に大学の教育責任ということからすれば、入学した者がそろって卒業していったかという視点で見ることも必要であろう。従って従来のように、入学という入り口だけで学生数を見ていくのではなく、途中の退学者数を折り込んで入学者数とすることにより、最終的には入学定員＝卒業者数となり、大学の教育・学生サービスの評価指標ともなりうるため2005年度以降にに向けて検討をしていく。

2005年度の入学者数の目標設定にあたっては、この視点からの検討を進めていく。具体的には4年間の退学・休学状況を参考に、4年後の卒業者数が入学定員を切らないように入学者数の設定を検討する。

18才人口の減少に伴い、今後の大学環境は、入学定員超過率を管理するより入学定員充足率を注視していかざるを得ない。そうならないためにも受け入れた学生がしっかりと卒業していくことの管理指標を設けることを2005年度に向けて検討している。

5. 退学者の状況と退学理由

A群 退学者の状況と退学理由の把握状況

(1) 現状と評価

本学の学科別の退学者数と他大学の平均と比較すると、文化人類学科においては約12%とほぼ同レベルにあり、臨床心理学科については約6%と一般的に他大学に比し少ないといえる。(別表1)これは、学科の特性として臨床心理学科は臨床心理士を目指し、進学をはっきりと希望する学生が40%と多く、目的意識がはっきりしていることが少ない退学者数にあらわれているものと思われる。(別表3)

不本意な入学による退学や入学後、大学生活になじめない学生の退学を未然に防ぐため、本学では下記のような方針を立てている。

本学の学科の特性に合った学生が入学するよう、本学の教育内容、学科の特徴等を受験前に周知できるよう広報すること。

その為に、大学案内の充実、オープンキャンパスでの模擬授業、高校への出張授業、AO入試等を活用し、目的意識の高い学生を募集すること。

また、入学後は目的を見失わず、学生が望む次のステップが踏めるよう教職員が一体となって教学面、課外活動及び生活面の支援をし、悩みをもった学生に対しては気軽に相談できる教職員がおり、早い段階でサポートが出来るシステムを構築すること。

悩みの相談体制に関しては、これまで全学年への担任制度の導入、オフィスアワー、1年次でのナビゲーション制度など、学生が教員に問題を相談する機会を増やし、間接的に退学者を減らす為の方策を取ってきたが、制度的な支援はまだ不十分といえる。例えば、授業欠席者への対応も各授業担当教員の裁量にまかされており、電話連絡をする教員もあり、自主性にまかせる教員もあり、対応がまちまちである。また、教務課や学生課が折に触れ学生との接触から得る情報も、伝達するルートが確立されていないため、十分生かされていない。

退学手続きについては、退学届けを渡す前に、原則として担任・ゼミ担当者との面談を設定し、理由・本人の気持ち・保護者の意向等を確認すると共に、就学の継続に向けてのアドバイスをしているが、既に本人が決断しており、十分な効果を上げることは出来ていない。

1996年の開学以来、2003年度末までの各年度の平均退学率は2.2%であり、内訳は文化人類学科3.1%、臨床心理学科1.5%となっている。(別表1)

各期毎の退学率については、3期生以降は在籍生がおり、今後数値は変動していくが、1期生の退学率は少し高い。(別表2)

学年別では1年次での退学が多く、また、取得単位数の少ない学生が多い。(別表4・5・6)

また、退学理由としては、両学科共に他大学、専門学校、就職等への進路変更が最も多く約70%である。但し、この中には経済的事情による進路変更も含まれている。(別表6)

(2) 改善・改革方策

文化人類学科は他大学にないユニークな学科であり、学科内容を広く周知させ、全国から目的意識をもった学生を集めることにより、意識の高い学生集団を形成することができると考えられ、広報の仕方の一層の工夫を検討している。

臨床心理学科の新入学生の目的意識は高いが、反面、臨床心理学に関心を寄せる学生の特性から、自分自身が悩み・問題等を抱えており、修学上、ケアの必要な学生が見受けられる。入学時の面接等では

の点の見極めをつけることも必要であると考えている。

入学後では、1回生で取得単位数の少ない学生に多数の退学者がでており、これらの学生に対して支援をすることにより、2回生以降の退学者をも減らすことが可能であると思われる。その為には、学生課・教務課・各学科が連携して情報を共有することが必要であり、学生課は学費の支払いに関連しての情報、奨学金等でカウンターへ来る学生の情報、教務課は履修登録状況、単位取得状況等の情報、各学科からは出欠、授業態度等の情報を出し合い、学生相談室・健康管理センターも交えて支援を行っているが、さらに組織的・機能的な取り組みを検討している。

また、現在は学生が学生課へ退学を申し出てから、担任や各学科教員へ面談を依頼しているが、どうして今まで大学から何のアプローチもなかったのかと思う学生もあり、大学として漏れのない組織的な支援策の必要性を痛感している。その為に、学生課と教務課がタイアップをし、履修状況や単位取得状況等を定期的にチェックし、問題を抱える学生の発見と、きめの細かいアプローチを現在行っているが、更に粘り強くすることが必要であると考えている。また、教員側から授業欠席の多い学生、授業中に気になる学生等、退学予備軍と思われる学生に対し、各学科教員が中心となって積極的なアプローチをすることが早期発見を可能にし、退学者を減らす為にはより有効な手立てとなることから、学生課・教務課と教員による学生委員・教務委員とのより組織的かつ機能的な連携について、現在協議をおこなっている。

別表1. 入学年度別退学率 2004年7月末現在(在籍者数は5.1現在)

(単位 %)

学科/入学年度	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2003年度まで 平均退学率(%)
文化人類	8.7	3.0	1.4	4.1	3.1	2.8	4.4	1.0	0.2	3.1
臨床心理	3.6	0.7	0.2	1.8	1.7	1.4	2.1	1.0	0.0	1.5
現代社会	-	-	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0
全 体	6.1	1.8	0.8	2.9	2.4	2.1	3.2	1.0	0.1	2.2

別表2. 入学年度別退学率 2004年7月末現在(在籍者数は5.1現在)

(単位 %)

学科/入学年度	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	5期生までの 平均退学率(%)	
文化人類	入学	16.7	10.1	11.2	15.9	10.0	8.9	6.0	1.3	0.7	11.9
	編入学	6.3	4.3	7.1	0.0	7.1	0.0	0.0	-	-	
臨床心理	入学	8.6	5.9	9.0	4.8	3.8	3.3	2.3	1.4	0.0	5.8
	編入学	0.0	0.0	8.3	4.3	0.0	0.0	0.0	-	-	
現代社会	入学									0.0	--
	編入学									-	
全 体	入学	12.6	8.0	10.1	10.4	6.8	6.1	3.8	1.4	0.3	8.8
	編入学	2.4	2.2	7.9	2.4	2.9	0.0	0.0			

別表3. 卒業後の進路について(2004年3月実施 学生生活アンケート)

	文化人類学科		全体	割合(%)
	2回生	3回生		
進学したい	15	7	22	13
就職したい	65	30	95	58
迷っている	32	16	48	29

	臨床心理学科		全体	割合(%)
	2回生	3回生		
進学したい	65	59	124	40
就職したい	40	49	89	29
迷っている	48	51	99	32

別表4 入学年度各学年別退学者数

入学年度		学 年								計
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1996 (1期生)	文化	12	2	3	6(1)	1	0	0	0	24 (1)
	臨床	5	1	1	3	1	0	1	0	12
1997 (2期生)	文化	6	1	3(1)	1	3	1	0	0	15 (1)
	臨床	1	0	2	3	2	0	0	0	8
1998 (3期生)	文化	2	6	4	2	3(1)	0	0	-	17 (1)
	臨床	0	6	4(1)	1(1)	3	1	0	-	15 (2)
1999 (4期生)	文化	9	4	4	7	0	0	-	-	24
	臨床	0	2	3	2	1(1)	0	-	-	8 (1)
2000 (5期生)	文化	9	2	4	1(1)	0	-	-	-	16 (1)
	臨床	1	1	3	1	0	-	-	-	6
2001 (6期生)	文化	6	5	2	0	-	-	-	-	13
	臨床	2	3	0	0	-	-	-	-	5
2002 (7期生)	文化	8	1	0	-	-	-	-	-	9
	臨床	3	2	0	-	-	-	-	-	5
2003 (8期生)	文化	2	0	-	-	-	-	-	-	2
	臨床	3	0	-	-	-	-	-	-	3
2004 (9期生)	文化	1	-	-	-	-	-	-	-	1
	臨床	0	-	-	-	-	-	-	-	0
	現社	0	-	-	-	-	-	-	-	0
		70	36	33 (2)	27 (3)	14 (2)	2	1	0	183

()内は編入学生内数

別表5 退学時期別単位取得状況

学年		1		2		3		4		5		6				
		春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	
取 得 単 位 数	0	22	12	3		1	6									44
	1~9	2	11	1	3		3									20
	10~19		3	2	3	1						1				10
	20~29	3	9	1	1					1						15
	30~39	1	2	2	5	1	3	1		1						16
	40~49		2	1	5	1	1	1	2		1					14
	50~59		3		4		4	1	3	1						16
	60~69				1	3	2		3		1					10
	70~79				2		3	1	4	3	1					14
	80~89					1			1		1				1	4
	90~99				2		1		2	1	1		1			8
100以上						2	2	6		2					12	
合計		28	42	10	26	8	25	6	21	7	7	0	2	0	1	183
		70		36		33		27		14		2		1		

別表6 退学理由別人数(年度別)

年度		1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	合計	%	
文化	家庭事情	1	0	0	1	1	0	3	1	0	7	5.6	
	経済的事情	0	2	0	4	4	4	4	0	0	18	14.4	
	進路 変更	未定	2	4	6	14	8	10	13	3	0	60	83
		他大学	5	1	0	2	4	5	1	1	0	19	
		就職	2	1	0	0	0	1	0	0	0	4	
	病気治療	1	0	0	3	3	1	1	0	0	9	7.2	
	本人事情	1	0	0	1	0	1	4	1	0	8	6.4	
臨床	家庭事情	1	0	0	1	1	0	1	0	0	4	6.3	
	経済的事情	0	0	0	1	0	0	2	1	0	4	6.3	
	進路 変更	未定	1	0	1	5	5	7	6	4	0	29	44
		他大学	3	2	0	0	3	2	3	2	0	15	
		就職	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	病気治療	0	0	0	2	1	0	3	0	0	6	9.4	
	本人事情	0	0	0	2	1	0	2	1	0	6	9.4	

理由は重複しているものあり

大学院研究科の学生の受け入れ

(学生募集方法・入学者選抜方法)

A群 大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

(門戸開放)

A群 他大学、大学院の学生に対する「門戸開放」の状況

(定員管理)

A群 収容定員に対する在籍学生数の比率および学生確保のための措置の適切性

文化人類学研究科

1. 目標

異文化間リテラシーを学ぶ意欲があり、フィールドワークによって積極的に問題発見をおこない、それに対する解決策を提示できる学生を求めている。

必ずしも学部で文化人類学あるいは関係分野を学んだ学生だけを求めているわけではない。そもそも日本の文化人類学は、他分野を学んだ後に文化人類学を専門とした教員、研究者が多い。広い視野を必要とする学問であるため、異なる分野からの学生も積極的に受け入れている。本学臨床心理学科からすでに2名が受験、合格し、修士号を取得している。また、他大学の文化系学部からの受験生も多い。

定員10名(収容定員20名)は、本学文化人類学科からの進学希望者がかなりいるとの想定で設定している。

2. 現状と評価

京都文教大学大学院文化人類学研究科修士課程定員10名(収容定員20名)は、本学文化人類学科からの進学希望者がかなりいるとの想定で設定され、2000年4月に開学し、第1期生として13名、第2期生として8名、第3期生として4名、第4期生として4名、第5期生として3名が入学している。2002年3月に第1期生のうち6名が修了し、2002年9月に1名、2003年3月に6名、2003年9月に3名、2004年3月に5名が修了している。

完全セメスター制を導入したため、海外でのフィールドワークなどのために休学したり留学したのちに修士論文を書いた場合でも、春学期・秋学期の修了を選べる点が学生には好評である。

本研究科の1学年の定員は、10名である。入学試験は秋期と春期の2回おこない、筆記(外国語および専門科目)および面接の他に、以下の資料を提出させ、総合的に選抜した。

- ・卒業論文またはそれにかわる論文
- ・上記論文の要旨
- ・研究計画書

2002年9月の入試においては、1名の他大学からの受験生があった。また、2003年2月に行われた入試では、4名の受験生があった。うち3名が本学人間学部文化人類学科、1名が他大学からの受験生であった。全員合格しているが、入学辞退が1名あったため、計4名が入学している。女子学生1名、男子学生3名という内訳である。

2003年9月の入試では、本学文化人類学科から1名、他大学から1名の受験生があり、2名とも合格している。いずれも男子学生である。2004年2月の入試では、内部から女子学生1名が受験した。3名とも合格し、入学している。

本学学部生の大学院志望者が減少している。また、進学希望者が必ずしも本研究科のみを希望するわ

けではない。これまでに京都大学大学院、神戸大学大学院、広島大学大学院、琉球大学大学院、鳥取大学大学院、奈良女子大学大学院、お茶の水大学大学院等に合格している。他の大学院に受験するのは、希望する研究テーマや指導教員を求めての選択である場合もあるが、日常の学生とのコミュニケーションやアンケートなどから、本学大学院の授業料が他の大学院のそれと比較して、かなり高額であることが、国公立をめざす主要な理由となっている。換言すれば本学の授業料の高さが本大学院への進学への障碍となっていると思われる。

京都文教大学大学院 入学者推移（2000 - 2004年度）										
研究科名	年度	期別	志願者数	内：外 (人)	受験者数	合格者数	辞退者数	入学者数	最終	内：外 (人)
文化人類学 研究科	2000	春期	17	12:5	17	13	0	13	13	9:4
	2001	春期	9	7:2	9	9	1	8	8	7:1
	2002	秋期	2	2:0	2	2	0	2	4	2:0
		春期	4	3:1	4	4	2	2		1:1
	2003	秋期	1	0:1	1	1	0	1	4	0:1
		春期	5	3:2	5	4	1	3		2:1
	2004	秋期	2	1:1	2	2	0	2	3	1:1
		春期	1	0:1	1	1	0	1		0:1

3. 改善・改革方策

学生に対する奨学金など、財政的な援助を考えることが急務である。なお、2003年度よりもうけたフィールドワーク奨励制度は好評であり、ほとんどの大学院生がこの制度を活用してフィールドワークをおこない、修士論文執筆に役立っている。この制度のさらなる充実がもとめられる。また、休学時にも利用を希望する声が多いが、これについては事務的、制度的な検討が必要である。

また、目標の からいえば、社会人が容易に学べるように、夜間、土、日のサテライトでの開講が開設時からの懸案事項である。これについては、定員が少ない小規模の研究科であり、教員も少人数であるため、いまだに実現していないが、毎年課題として議論している。ただし、現行カリキュラムでの進学をのぞむ社会人等の受験希望があれば、とくに必修科目の夜間あるいは土曜日の開講などを検討する必要がある。社会人・外国人・留学生からの受験相談は数件あったが、実際に受験した例はまだない。

収容定員を満たしていない状態が継続し、また本学文化人類学科からの進学が減少しているため、学部・大学院の5年一貫教育を将来構想としてたてている。2005年度より、その第1歩として、4年次生以上で成績優秀かつ相当数の単位をすでに修得している学生に、大学院の指定した科目の単位修得を認める「科目等履修制度」を導入する。2005年3月に語学の試験、面接をおこない、履修生を決定する予定である。定員充足が出来ない状態が今後も継続した場合、定員の変更、教員組織の改編を将来計画として建てている。2005年度の入学生は9名の予定であり、ほぼ定員を満たす状況である。

臨床心理学研究科

1. 目標

社会は良質の臨床心理士の養成を待っている。たとえば、スクールカウンセラーは中学の全校に配置するという計画を文部科学省は持っているが、その数が絶対的に不足している。また、医療分野においても小児科・内科・外科・産婦人科などあらゆる診療科において良質の臨床心理士の存在が必要となっている。そのためにできるだけよい質の学生を多く養成することを目標としている。

さて、臨床心理学研究科にふさわしい学生とはどのようなひとなのかという点については、なかなかむずかしい問題である。すなわち、心理療法の実践する能力の持ち主とはどのような人物であるのかについては、学界においても明確なイメージがあるわけではない。

しかし、以下のような点についてはある程度の合意されることであろう。

心理療法家は、常識を超えた判断や考えを必要とされるので、常識にとらわれない柔軟な思考や感情の持ち主であることが重要である。また、同時に社会常識をきちんと理解し、適応できることが重要。

自己を主張するよりも、クライアントの個性を生かすことができる人物でなければならない。しかし、クライアントの言いなりになるようでも困る。それをうまく折り合いがつけられるような人物。

主観的な世界が十分に理解できる能力と同時に客観的な現象も見ることができる。

プライバシーなどを十分に守ることのできるような人物。学業成績だけではなく、人物を充分に見きわめる面接試験などが必須である。

しかし、設備、教員スタッフの数などの限界を考慮に入れて、1 学年 30 名の定員を設定している。これらは臨床心理士養成のための大学院としては大変多い部類に入る。しかし、現在のところ応募者は大変多く平均 5 倍程度の入試競争率となっている。

2. 現状と評価

2000 年 4 月に修士課程として設立の後、2002 年 4 月には博士課程が設置され、博士（前期）課程となった。開設後 3 年は春期募集のみで実施し、111 名～131 名の志願者、開設後 4 年目に秋期募集を設け 2 回の募集となり、2003 年は合計 212 名、2004 年度は 198 名であった。博士（後期）課程は開設後 8 名、9 名、10 名と推移している。

学生募集にあたり、本学出身学生と他大学・大学院の学生とを同一条件の制度で選抜している。他大学、院生も年度ごとにばらつきはあるものの、上表のとおり入学している実績がある。学外へ向けての門戸は確実に開かれ、公平に入学試験が実施されていると言える。

博士（前期）課程の定員管理の基本的考え方は各年度、入学定員比率（1.0）以内の入学者数遵守を基本としている。したがって、学生収容定員を上回ることはなく、また予測外の辞退者が無い限り 30 名の入学者を守っている。

また、博士（後期）課程（定員 2 名）の入学定員の考え方は同様で、収容定員は本学の場合 0.83 であり問題ない。

京都文教大学大学院 入学者推移（2000 - 2004 年度）										
研究科名	年度	期別	志願者数	内：外 (人)	受験者数	合格者数	辞退者数	入学者数	最終	内：外 (人)
臨床心理学研究科	2000	春期	131	39:92	127	31	1	30	30	13:17
	2001	春期	113	53:60	111	32	2	30	30	18:12
	2002	春期	132	45:87	131	35	6	29	29	11:18
	2003	秋期	110	41:69	106	24	3	21	30	13:17
		春期	102	36:66	97	9	0	9		
	2004	秋期	133	43:90	128	19	3	16	30	20:10
春期		65	27:38	62	14	0	14			
（学臨 後研 期究 課科 理）	2002	春期	8	7:1	8	2	1	1	1	1:0
	2003	春期	9	8:1	9	2	0	2	2	2:0
	2004	春期	10	7:3	10	2	0	2	2	2:0

受入の対象者は博士（前期）課程の受け入れの対象者は、本学学部の卒業生および他大学関連学部学科の卒業生で専門的な教育を求めている者を中心として受け入れている。また、多様な学生を積極的に受け入れるため、大学卒業後、既に教育・医療・福祉等の領域で心理臨床経験を有する者も受け入れ対象としている。

博士（後期）課程の受け入れの対象者は、本学大学院博士（前期）課程修了者、および他大学院の臨床心理学関連研究科の修了生で、修士課程・博士（前期）課程の内容を基礎として、より高度な専門的な教育・訓練を求めている者とする。また、多様な学生を積極的に受け入れるため、大学院修士課程・博士前期課程修了後、既に教育・医療・福祉等の領域で心理臨床経験を有する者も受け入れの対象としている。

選抜の方法は、博士（前期）課程は出願時に研究テーマと2年間の研究計画の概略を記した研究計画書と過去の研究成果を提出させ、選抜試験では、学科試験（心理学専門知識および外国語）・小論文・面接をあわせて実施している。研究計画書および過去の研究成果、選抜試験成績を総合的に評価し、入学者の選考を行っている。

博士（後期）課程では、本学博士（前期）課程修了者については、研究計画書審査、修士論文審査、語学試験及び面接により選考を行っている。他大学大学院臨床心理学研究科修士課程を修了した者及び修了見込みの者で入学を希望する者は、同等の選考基準によって試験を行っている。

それだけではなく人物を見抜くために面接試験を重視している。面接ではこれまでのボランティア体験などを尋ねたりして、それがどのような心理的体験を持っているのか、それが今後の訓練などによって成長発展を遂げることができるものであるのかを見抜くようにしている。面接評価は複数の教員で行い、面接時間も20分程度をかけて行っている。

博士後期課程においても同様で、研究業績のみならずこれまでの心理療法体験や後輩への指導力などを総合して評価を行っている。

3. 改善・改革方策

本研究科は、臨床心理学の分野において、他大学院研究科に比べ最初期に設立された。しかし、その後、同種の研究科が全国に110を超える大学院にまで拡大するようになった。このための大学間の競争が激化している。その競争に負けない教育の質と学生サービスを心がけ、毎月開催している研究科委員会で協議を行っている。

具体的な対策として実習先の更なる充実を図っている。たとえば、病院での実習でもその範囲を広げると共に、新しい領域の開拓（ターミナルケア、エイズ、遺伝研究など）を検討している。

また、産業分野はこれまで重視されながら未開拓の分野である。そこで企業と提携して実習生を派遣することを検討している。これはすでに2004年度末から大学院生が産業メンタルヘルス対策の一員として実習体験を行っている。

また、大学院修了生に対しても教員が連絡を取りサポートを行うようにしている。

2004 年度大学院入学者選抜状況

() 前年

				志願者	受験者数	一 次 合格者数	二 次 合格者数	手続者数	辞退者数	入学者数
文化人類 学研究科	修 士 課 程	秋期	1 0	2(1)	2(1)	2(1)	/	2(1)	0(0)	2(1)
		春期		1(5)	1(5)	1(4)		1(4)	0(1)	1(3)
		合計		3(6)	3(6)	3(5)		3(5)	0(1)	3(4)
臨床心理 学研究科	博士前 期課程	秋期	3 0	133(109)	128(103)	40(50)	19(24)	17(22)	1(1)	16(21)
		春期		65(102)	62((97)	30(31)	14(9)	14(9)	0(0)	14(9)
		合計		198(211)	190(200)	70(81)	33(33)	31(31)	0(1)	30(30)
	博士後 期課程	春期	2	10(9)	10(9)	2(2)	-	2(2)	0(0)	2(2)